

A-1 末梢循環障碍患者に対する高圧酸素の使用経験

(九州大学医学部井口外科)

井口 潔、八木 博司、草場 昭、岡 直剛、
藤永 裕、○清瀬 隆、伊藤 年徳

私共は末梢循環障碍患者に対する高圧酸素療法の臨床的意義を検討するため、外科的処置に困惑した症例13例を選び、これに米国Vickers社製の高圧酸素装置を用いて高圧酸素療法を行なった。

自験例の内訳は第1表に示す如くで、13例の患者に42回の高圧酸素療法を行ない、7例に自覚的、他覚的、症状の改善を認めた。これら7例に対する高圧酸素療法施行の回数は2回から11回に及び、平均5回で、高圧酸素療法は原則として毎回2気圧1時間とした。

症状改善を認めなかった6例では、2例が不変、4例が効果判定不能で、不変例の2例は何れも四肢の広範囲壊死の症例であり、高圧酸素療法により壊死の範囲を縮小させる事は出来なかった。

効果判定不能例の4例は耳痛その他加圧中の合併症のため高圧酸素療法を1度しか施行し得なかったもので、これら症例に対して高圧酸素療法の効果を云々する事は出来ないように思われる。

奏効例7例の内訳はT.A.O. 3例、Raynaud病1例、静脈血栓症2例(この中1例は下腿潰瘍合併例)、外傷後の難治性潰瘍1例で、T.A.O.の3例では全例 rest painの消失を認め、この中2例において壊死と難治性潰瘍の消失を認めた。

壊死を合併していたT.A.O.の1例には高圧酸素療法を11回行ない、潰瘍形成を認め、1例には高圧酸素療法を8回行なった。これらT.A.O.の3例は何れも血行再建術、交感神経切除術等の外科的療法をうけた後のものであり、外科的処置に困惑した症例であった。

Raynaud病の1例は胸部交感神経切除後、指先に潰瘍形成をきたしたもので、この例には高圧酸素療法を3回行ない、潰瘍の明らかな縮小を認めた。

下腿潰瘍を伴う静脈血栓症の1例は5回の高圧酸素療法で潰瘍の消失を認め、高圧酸素療法中に高圧酸素療法を行なわなかった期間を挿入して、潰瘍面積の縮小傾向を観察したが、高圧酸素療法中の

高圧酸素使用症例

病名	症例数	高圧酸素 使用回数	著効	有効	不変	不明
T.A.O.	7	25	2	1		4
レイノ 症候群	1	3	1			
四肢壊死	2	4			2	
難治性 潰瘍	1	2		1		
血栓性 静脈炎	2	8	1	1		
合計	13	42	4	3	2	4

下腿潰瘍を伴う静脈血栓症
(高圧酸素療法で潰瘍の消失を認め)



治療前 治療後

方が潰瘍面積の縮小速度が早い傾向を認めた(図1)。

外傷後の難治性潰瘍の1例は加圧中耳痛を訴えたため2回の高圧酸素療法で中止したが、治療後創面よりの分泌物は著明に減小し、創面は鮮紅色を呈して、皮膚移植により全治させる事に成功した。

以上の諸経験を通して、私共は末梢循環障碍患者に高圧酸素療法を行なった場合、次のような利点のある事を知った。

1. 高圧酸素には壊死に陥入った組織の demarcation を促進し、湿性壊死を乾性壊死に変化させる傾向が認められた。

2. 高圧酸素は動脈閉塞症例において、rest pain を緩解させる傾向を認め、rest pain 緩解の傾向は高圧酸素療法直後に著明であるが、漸次復元し、高圧酸素療法の回数が重なるにつれて、rest pain 緩解の期間は長くなり、ついには消失する傾向を認めた。

3. 高圧酸素には創傷治癒を促進させる傾向があり、特に難治性の潰瘍に対して有効と考えられた。

4. 以上の諸利点の他に、高圧酸素には anoxia に陥入った患側肢を紅潮させる傾向があり、かゝる傾向が強く現われる症例程高圧酸素療法に奏効し易い傾向を認めた。

現在、私共は anoxia に陥入った組織に少しでも酸素を与え易くする目的で、高圧酸素療法施行前に患側肢にイミダリン、レセルボン等の血管拡張剤を動注し、かゝる方法が高圧酸素療法の効果を高める上において有用であるか否かを検討している。

(上記文中の T.A.O. は Thromboangitis obliterance の略)